NDC 913

長編少年少女小説

ボクはのら犬

岡野薫子著

実業之日本社　1965年
208頁　21.5cm

定価400円

ボクはのら犬

1965年12月15日　初版発行

著者　岡野薫子

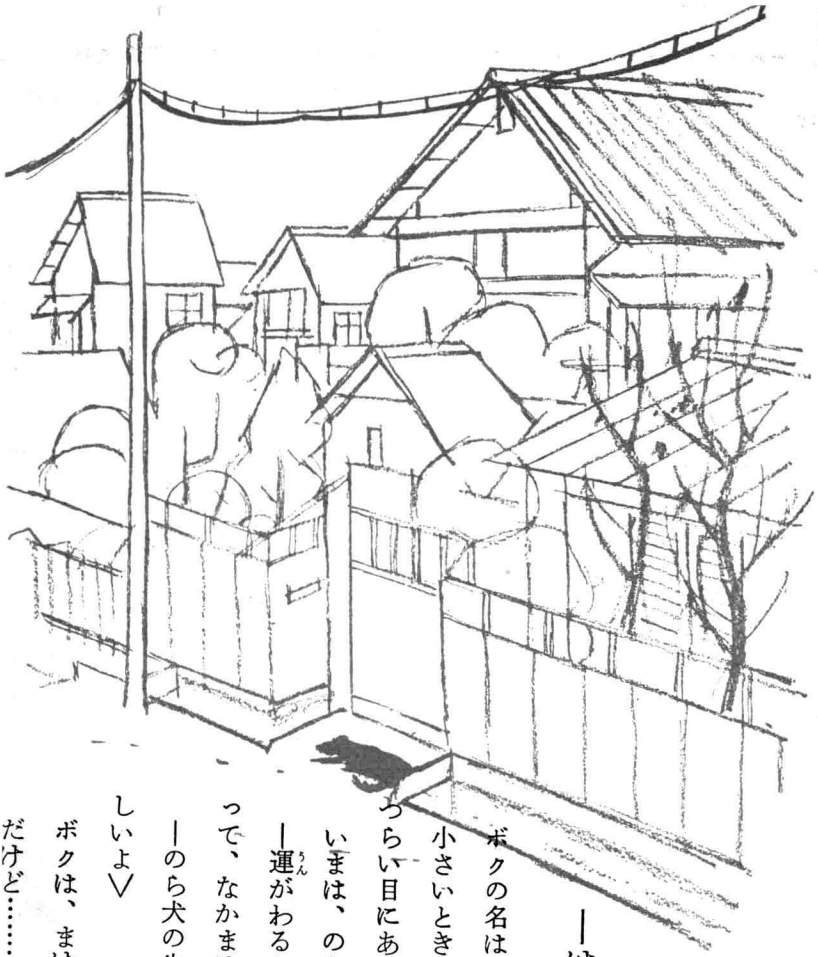
発行者　増田義彦

印刷所　星野精版印刷株式会社

発行所　株式会社　実業之日本社

東京都中央区銀座西1～3
TEL (561) 5121　振替東京 326

© Kaoruko Okano 1965, Printed in Japan

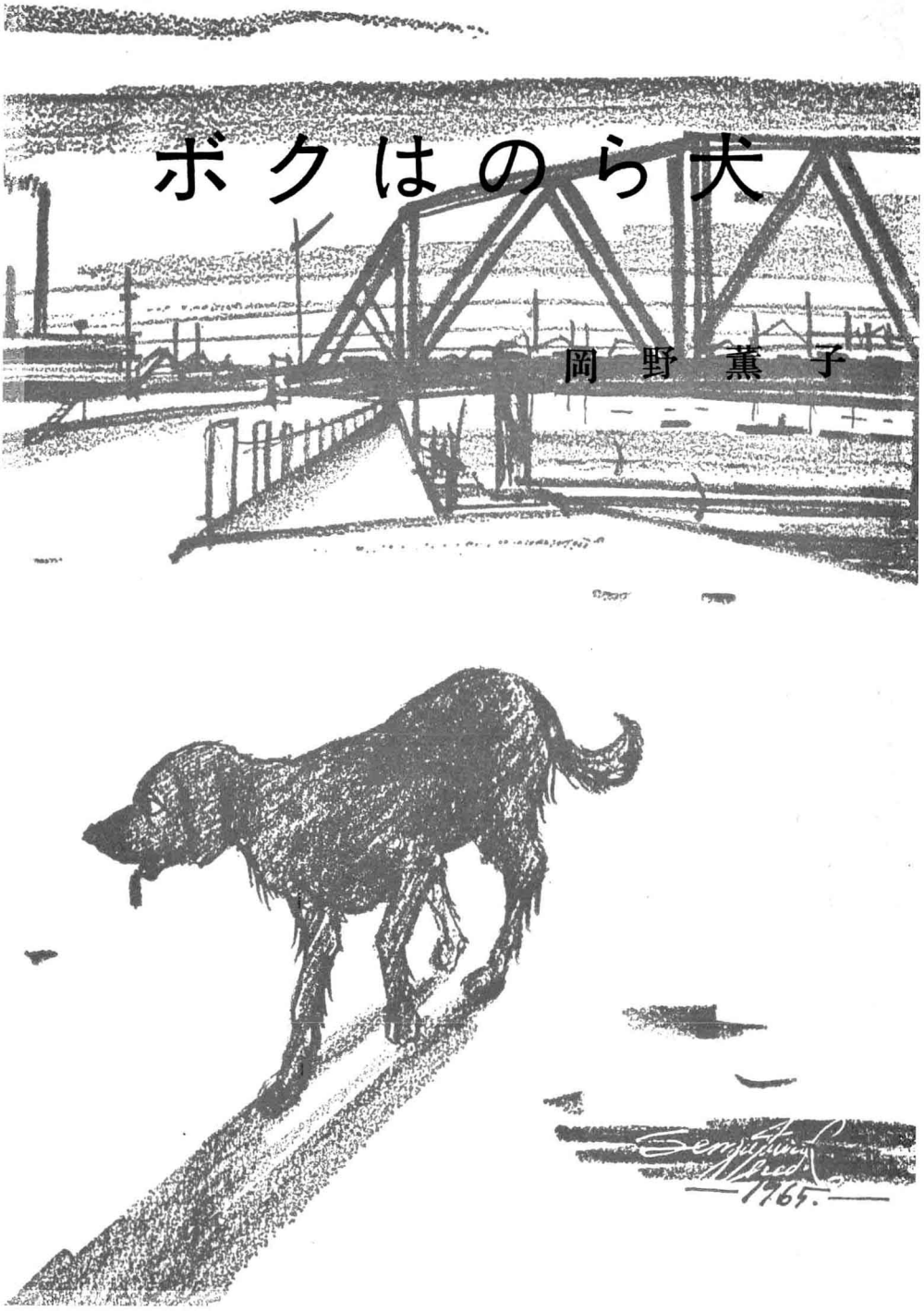


―はじめに―

ボクの名は、クロ。
小さいときから、ずいぶんいろいろと、つらい目にあった。
いまは、のら犬クロ。
―運がわるかったのさ〉
って、なかまはいう。
―のら犬の生活だって、気らくでたのしいよ〉
ボクは、まけずにいいかえす。
だけど……。

ボクはのら犬

岡野薫子



—もくじ—

第1章　ボクの幼年時代（ようねんじだい）…… 5

第2章　のら犬なかま……65

第3章　橋の下の家…… 113

第4章　ひとりになって…… 117

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

装幀・さしえ

池田仙三郎

第1章　ボクの幼年時代

はじめに……（クロの紹介）

1. よしゆきくんとボク
2. すばらしい日々
3. かたきどうし
4. ひとりぼっち

はじめに……（クロの紹介）

子犬のクロは、箱にのって、町の中の川をくだっていった。大雨のあとの川は、水かさがまして、流れも急だ。小さな板きれや、ゴミの袋や、炭俵や、いろいろなものが、くるくるまわったりぶつかったりしながら、流れていく。川の水は茶色くにごって、ごぼごぼいった。

クロは、小さな前足に力をこめて、箱の中にじっとすわっていた。そうしていないと、じきにからだがぐらついて、今にもひっくりかえりそうになる。クロは心細くて、キューンとひと声ないた。

そのとたん、ガツン――、なにかにぶつかったらしいにぶい音がして、クロは思わずよろけた。箱がかしぎ、あっというまに、水の上にほうりだされた。クロは、夢中で水をかく。目の前を、からになった箱が、おどりながら流れ去っていった。

「やあ、犬が――、黒い犬が流れてくる」

「おうい、子犬だぞオ」

川岸のサクから身をのりだして、子どもたちがさけんだ。下を指さしながら、ばらばら走り、また、身をのりだして川をのぞく。

子どもたちは、てんでに、先っちょに小さな網のついた長いさおをもっていた。そのさおで、今までボールつりをしていたところだった。

雨のあとでは、川上からいろいろなものが流れてくる。どういうわけか、その中にまじって、いくつもいくつも、まるで、ま新しいボールが流れてくる。川下の子どもたちは、雨が上がるとここへ集まって、流れてくるボールをすくうのをたのしみにしていた。ときには、思いがけないものが流れてくる。それがきょうは、生きた子犬というわけだった。

「いいかい。おれがこっちへ寄せてやるからな。早いとこ、うまくすくえよ」

「よしきた」

ひとりが、流されてくる子犬を岸のほうへひき寄せると、もうひとりが、子犬の頭からすっぽり網をかぶせ、高だかと宙にすくいあげた。

「うまい」

「やった、やった」

「わあーい、犬の子つっちゃったぞオ」

クロは苦しがって、網の中でキャンキャンあばれた。目にしみるような青空と、茶色くうずまく川の流れとが、かわるがわるまじりあって、クロの目にとびこんだ——。

クロは、今、机に向かっている私の、よく見えるところにすわっています。ガラスまどの向こう……、おむかいの家の門の前です。秋の日のさす明るい石だたみの上に、ゆったりとくつろいで、クロはすわっています。前足の間に鼻先をうずめ、カキの葉っぱの散るのを、ねむそうな目でながめています。クロは、ずいぶん変わった毛なみをしていて、クロといっても、まっ黒ではなく、銀色に光る毛がまばらにまじっていて、全体は……、そう……、灰色に近い黒です。どことなく、刈りとったあとのたんぼを思わせるのは、そのざらざらした毛なみのせいかもしれません。

とにかく、クロは、変わった……風変わりな犬です。今も、私が、クロをガラスごしにながめていると、クロは、ちゃんとそれを知っていて、たれさがった耳をぴくつかせ、片目をきょろっとあけて、こちらを見かえします。申しわけのように、そのスダレのような尾をふって、地面をゆっくりはたきます。まるで、くたびれたハタキみたいだって、いつか、私の友だちはわらいました。

クロは、どんなときでも、――目をつむっているときでも、自分のまわりでおこっていることを、ちゃんと知っています。たとえば、だれかが、私の家の勝手口へやってくるとします。すると、クロは、すっと立って姿を消してしまいます。小さな私の家は、ちょうど道のまがり角に建っていて、クロがいつも

すわっているそこからは、勝手口まで、とても見とおせるはずはないのです。それでも、においかなんぞで、ちゃんとわかるのでしょう。私は、クロをながめて、あ、だれかきたな——と思い、立っていきます。

とくに、やってくるのが酒屋のとき、クロは、おおげさに、まるで、とびはねるようにして逃げだすので、私は、いつか、酒屋さんにきいてみたことがあります。

「うちの近所にいつもいる、大きな黒い犬、知ってる？」

「ええ、知ってますよ。ねずみ色の毛の、変なやつでしょう」

「あの犬に、あなた、石でも投げたの」

「あれっ、見てたんですか？」

大きな声をだしたあと、酒屋さんは、

「あんなやつは、あぶないんですよ。保健所で、早くとりにきてくれるといいんですがね」

もっともらしい顔をして、いうのでした。

酒屋さんは、なんにも知らないのです。クロが、私とは、ずっと前からの友だちだということを……。それを知っていたら、こんなふうには、きっといわなかったでしょう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

二年前――、そのころ、私は、まだ学生で、よその家のはなれをかりて住んでいました。そこの家には、ふたりの子どもがいて、上のあきらくんは、中学にはいったばかりでした。あきらくんは、タローという名の犬を飼っていました。タローは、茶色のつやつやした毛の、小がらな雑種犬で、まだ、ほんの子犬のころに、あきらくんがひろってきたという話でした。

ひっこしてきた日、私は、さっそく、あきらくんから、タローを紹介されました。

タローは、きちんとすわって、りこうそうに光るまるい目を、私のほうへ向けていました。湿った鼻をぴくつかせ、自分の前にいるのがあやしいやつではないことを、たちまち、かぎとったらしく見えました。あいそうよく、しっぽをふり、お手をしたくてむずむずしているふうに、前足をいそがしくふみかえます。

ところが、私のほうは、ひと目、タローを見たときから、どういうものか、この犬が、きらいでした。どことは、はっきりいえないけれど……、しいていうなら、タローのりこうそうなところが、全部、私の気に入らなかったのです。

でも、そんなことをいって、きらっては、あきらくんにすみません。

「どうぞ、よろしく」

私は、タローと握手し、おいしいビスケットを進呈しました。

タローは、しっぽをちぎれそうにふりながら、ビスケットを食べ、食べ終わると、少し落ちつかないように、うしろを、きょろきょろふり向きました。ふしぎに思ってそちらを見ますと、大きな灰色の犬が、そこにうっそり立っていました。これが、クロと出会った最初だったのです。

クロは、用心深い目をして、私を調べるようにながめていました。

「ああ、おなかまがいるのネ」

私は、クロのほうへ、何気なく、ビスケットをほうってやりました。すると、

「だめっ」

思いがけない強い調子で、あきらくんがさえぎりました。

「だめだよ、クロにやっちゃあ」

あきらくんは、ほほをふくらませていうのです。

「クロって、わるいやつなんだよ。ずるがしこくてさ。うちのタローがわるくなったの、みんな　あいつのせいなんだ」

クロは、ビスケットには見向きもせず、上目づかいに、こちらをじっとながめていました。

あきらくんは、いまいましそうに、足もとの小石を、カツンとけとばしました。

クロは大きな目をきょろっとさせて、ゆっくりと小石のゆくえを見送りました。

あきらくんはくやしがって、小石をひろうなり、ばらばら投げつけました。すると、クロは逃げもしないで、まるでゲームでもするみたいに、四本足をあちこちあげて、小石をよけるのです。私は、そのかっこうに、思わず、ふきだしてしまいました。

あきらくんは、本気になって、追いかけていきました。

そのとたん、クロは、軽々と生けがきをとびこえて、どこかへいってしまいました。

「すごいなア。クロって、軽業師みたい」

私は、感嘆の声をあげました。

あきらくんの家で、私は、クロの姿を、ときどき見かけるようになりました。近くの広っぱの前を通りかかると、クロは、ふいに、そこからとびだして私をおどろかせました。

「あっ、クロ」

クロは、少しはなれたところから、しっぽをゆらゆらふって、うれしそうなようすをみせます。でも、けっして、なれなれしく近づいてこようとはしません。私は、ひそかに、クロが、どことなくふつうののら犬とはちがっているのに、心をひかれました。

その後まもなく、私は、あきらくんの家から少しはなれた今の家に、ひっこしました。クロたちと会うこともなくなり、いつか、クロのことなど、わすれるともなく、わすれていました。ところが、最近になって、とつぜん、クロが、今の家にたずねてきたのです。

クロは、相変わらずのようすで、しっぽをゆらゆらさせながら、あまりおもしろくもないといった顔で立っていました。でも、クロはうれしかったのでしょう。クロのきょろっとした目は、うれしさをかくしきれずに輝いていました。

「ふーん、よく、ここがわかったのネ」

私がつぶやくと、クロは、ちょっと気がかりそうに、私の目をみつめてあとずさりました。

「クロ」

呼びかけると、クロはびくっとして、わざと走り去ろうとするようすさえ、

見せました。

そのうち、クロは、きまった時刻に――、日の暮れがたに、かならず、やってくるようになりました。私は、クロが、なにかうったえるような目をして、熱心に、私の顔をみつめているのに気がつきました。

（なにか、話したいのかしら……。きいてほしいことでもあるのかしら……）

その日、クロがそばへやってきたとき、私は、そっと、いってみました。

「もし、おまえの気が向いたらね、話してごらんなさい」

クロは、ぴくんと耳をもたげ、おどろいたように、私の顔を見ました。それから、考え深そうな目をふせて、えんりょがちの小さな声で、

――ボクの話、ききたいかい〉

と、いいました。

クロは、くびをかしげ、なんだか迷っているように見えました。

そうなると、こんどは、私のほうで身をのりだしました。

これが、そもそものはじまりで、私は、クロの身の上を、くわしく知るようになりました。クロは、私のところへやってくると、気の向くまま、ぽつぽつ話しては、帰っていきました。私が、つい夢中になって、それからそれから――と、しつっこくたずねると、しまいに、クロは、ふいっと立って、どこか

へいってしまうのでした。

（ああ、しまった）

と、私は思う。

（また、クロったら、二、三日やってこないかもしれない）

クロの話をきいているうちに、だんだん、私は、その話をひとりで胸の中にしまっておくことが、できなくなってきました。いつか、だれかにきかせたい……もっとたくさんの人たちに……、そう思うようになりました。

クロに、そのことをいってみましたら、たいくつそうにあくびをして、

——そんなに、ボクの話、おもしろいかな〉

っていいました。

それから、クロは、少し心配そうに、どんなふうにして、みんなにしらせるのか——と、たずね、また、ボクの話……、そのまま、まちがいなく書くんだろうね——と、念をおしました。

もちろん、そのまま、ありのままに——と、私は答えました。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com